【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	和歌山県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	南部川村立　上南部中学校					
学　年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	8	１６
生徒数	６４	５７	４９	2	１７２	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「 生徒一人ひとりの個性や能力を生かす学習指導の工夫　」
―― 国語・数学・英語科を中心とした指導法の工夫 ――

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・ １・２・３年国語
　教科学習における確かな学力を定着させるための基礎・基本の教科であるため
・ １・２・３年数学
　生徒の理解度に差が出やすい教科であり、数値的な結果が得られやすいため
・ ２・３年英語
　個々の生徒の理解度の差にきめ細かく対応するため

(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○　テーマ 「 生徒一人ひとりの個性や能力を生かす学習指導の工夫　」 ――　数学科を中心とした指導法の改善　―― ○　研究の見通し（仮説） 生徒一人ひとりを大切にし、確かな学力を定着させるため、本年度は数学科の学習において、ティーム・ティーチングによる授業形態を積極的に展開する。その中で、課題プリントや実物教材、作業的な活動やコンピュータ等を活用して、生徒の興味・関心をかき立てながら学力の向上を図る。 ○　研究の内容・方法 ・ 指導に有効な課題プリントや実物教材、視聴覚教材等をいかに準備し、授業のどの段階でどのように位置づけて活用すればよいかを研究する。

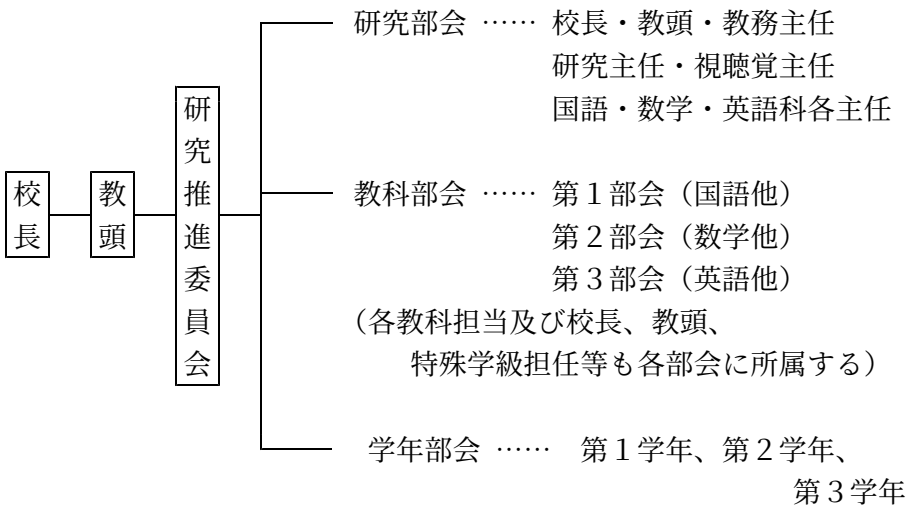
	・ 作業的・体験的な学習を、どのような方法・形態・割合で授業の中に取り入れるべきかを研究する。 ・ ティーム・ティーチング授業における生徒一人ひとりの学習の動きや反応を、どんな形で記録し、指導に生かしていくのかを研究する。 ・ 生徒の自主的な評価及び客観的な評価をいかに行うべきかを工夫する。

平成15年度	○ テーマ 「 生徒一人ひとりの個性や能力を生かす学習指導の工夫 」 ── 国語・数学・英語科を中心とした指導法の工夫 ── ○ 研究の見通し（仮説） 生徒一人ひとりを大切にし、確かな学力を定着させるため、研究対象教科を国語・数学・英語科に広げ、教科に応じた指導方法・授業形態・教材開発等を積極的に研究する。その中で、課題プリントや実物教材、作業的な活動やコンピュータ等を活用して、生徒の興味・関心を引き出しながら学力の向上を図る。 ○ 研究内容・方法 ・ 研究組織体制の充実を図り、研究部会・教科部会・学年部会がそれぞれの役割を効果的に機能させ、各部会の提案を研究推進委員会で検討し、全教職員の相互理解と連携のもとに実践を進める。 ・ すべての教科で、年間指導計画・評価規準・評価方法・指導方法・指導形態・教材開発（課題プリントなど）・評価テスト等を作成し、評価規準に基づいた実践を進める。 ・ 各教科での実践を分析・検証し、評価を事後指導の手だてに生かすとともに、教科部会で課題を明確にし、次年度への取組につなげる。 ・ 生徒・保護者の意識をアンケート調査し、結果を分析して、生徒に対する指導や保護者の理解を求める上での参考とする。 ・ 研究発表会（２学期中旬）を開催し、教職員の研究に対する意識の高揚を図るとともに、本校の取り組みについて普及に努める。

平成	○ テーマ 「 生徒一人ひとりの個性や能力を生かす学習指導の工夫 」 ── 国語・数学・英語科を中心とした指導法の工夫 ──

16年度	○　研究の見通し（仮説） 　生徒一人ひとりを大切にし、確かな学力を定着させるため、前年度に引き続き研究対象教科を国語・数学・英語科を中心として、全教科において指導方法・授業形態・教材開発等の研究を積極的に展開する。その中で、課題プリントや実物教材、作業的な活動やコンピュータ等を活用して、生徒の興味・関心を引き出し学力の向上を図る。 ○　研究内容・方法 ・ 研究組織体制を効果的に機能させ、研究部会・教科部会・学年部会がそれぞれの役割を果たし、各部会の提案を研究推進委員会で検討し、全教職員の相互理解と連携のもとに実践を深める。 ・ 各教科で評価規準に基づいた実践を進める中で、どういう成果と課題があるのかを分析・検証し、評価を事後指導に生かすとともに、本校の課題を明確にし、今後の取組に生かす。 ・ 生徒・保護者の意識アンケート調査を実施し、前年度と比較する中で、生徒には日頃の指導の手だてとして、保護者にはこの取組の理解を求める上での参考とする。 ・ ３年間の取組をまとめ、その内容と成果の普及に努める。

(3)　研究推進体制



　統括部会を研究部会として研究の方向性を提案し、研究部会を教科部会として各教科の年間計画・指導方法・評価基準・教材開発等を検討し、学年部会が生徒・保護者アンケートの集計・分析に携わった。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

（１）全体的に授業に対して生徒が意欲的なってきた。

Ｔ.Ｔ・少人数・習熟度別学習に関する各教科のアンケートから、従来の一斉授業と比べると肯定的な意見が多数を占めており、これらの意見と日頃の生徒の学習意欲には相関関係があると考えられる。いずれの指導方法・指導形態にしても、以前より生徒に対してきめ細かな対応ができるようになり、数学では調査テストと確認テストの比較で全体的に顕著な伸びが見られた。

（２）年間指導計画・単元計画の作成を通して授業を見直す機会になった。

年度当初、各教科で年間指導計画を作成し、まず国立教育政策研究所の「観点別評価規準」に基づいた学習指導案を１・２学期の学校訪問や研究発表会で作成した。不十分な部分もあったが、今まで行なってきた授業計画や指導案作りを見直す機会となり、「観点別評価規準」をもとに、授業の目当てをしっかりともって指導計画を作成することの大切さを確認できた。

（３）指導方法・指導形態を見直す機会になった。

説明中心の画一的な一斉授業とは違った授業方法・授業形態（Ｔ.Ｔ、少人数、習熟度別学習等）に取り組んだことにより、授業に対する視野が広がり、ワークシートや教材プリント、調査テストや確認テスト等の教材開発が進み、授業の見直しが行われるようになった。また、生徒と関わる機会が増え、きめ細かな指導が可能になった。

（４）評価方法を工夫改善する機会になった。

従来のペーパーテスト中心の評価方法に偏りがちだった評価が、各教科で「観点別評価規準」にそったいろいろな評価方法（授業観察・ワークシート・レポート作成・自己評価カード等）を工夫することにより、客観的な視点でバランスのとれた評価が行われるようになってきた。

（５）生徒・保護者の願いを知ることで、学習指導について教職員が意見交換し、課題をもって指導方法を工夫するようになった。

学校生活アンケートや習熟度別学習アンケート、各教科アンケートや自己評価カード等から、今までになく各方面の意見を聞く機会が増え、これまでの指導方法を見直す参考となった。また、複数の教職員が教科部会や授業の教材研究で話し合う機会が増えたことは、教職員の課題意識を高める結果となり、個々の能力を伸ばす効果的な指導方法とはなど、課題をもって議論する機会が多くなった。

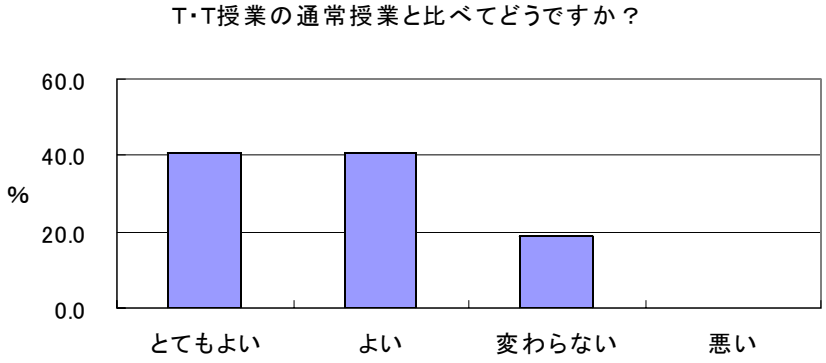
【　研究冊子・各種アンケートより抜粋　】

◆　国語科Ｔ．Ｔアンケートより（第１学年１クラス抽出）

問１　２人の先生が入る授業（Ｔ．Ｔ）はどうでしたか。

ア　とてもよい　　イ　よい

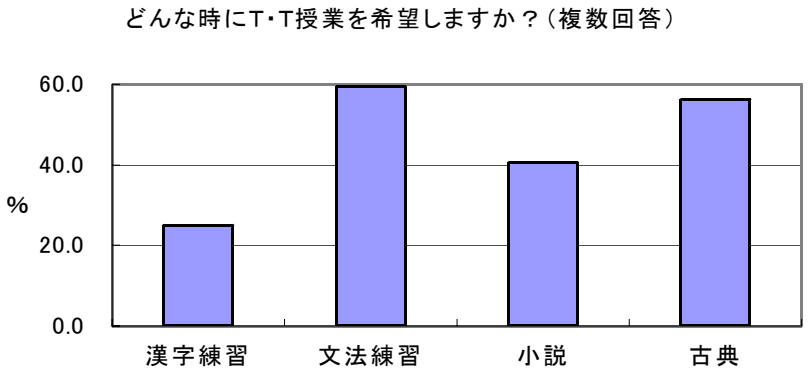
ウ　変わらない　　エ　悪い



問２　ア、イと答えた人は、その理由を書いてください。

- 質問がしやすいから　　１４
- いっぱい見てもらえるから　　４
- ２人いたらすぐに来てくれて速いから　　３
- 先生が２人いるので多くの生徒に対応できるから　　３
- ２人いた方が効率よく授業がすすむから　　１
- たのしいと思うから　　１

問３　このあと、どんなときに２人の先生に入ってもらいたいですか。

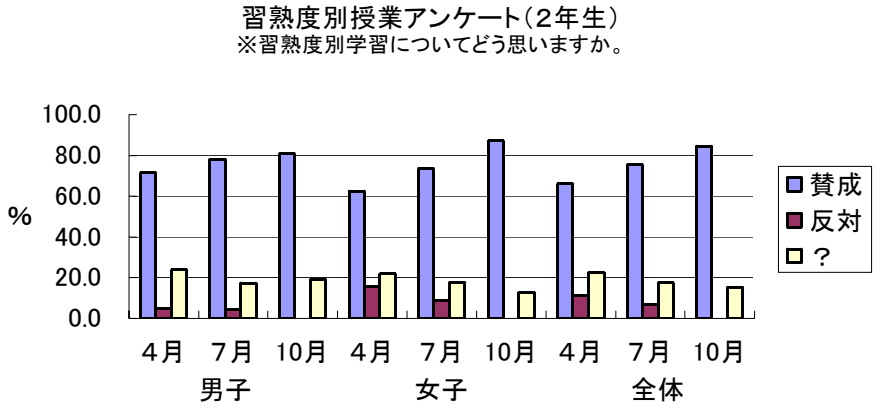


Ｔ．Ｔの授業では、 一人一人が質問しやすく、その場でアドバイスを受けることができ、漢字プリントによる練習の場面においては、書き誤りや筆順等についてきめ細かい助言をすることができました。この漢字ワークシート学習では、生徒がよく書き誤る漢字を教師側がチェックし、

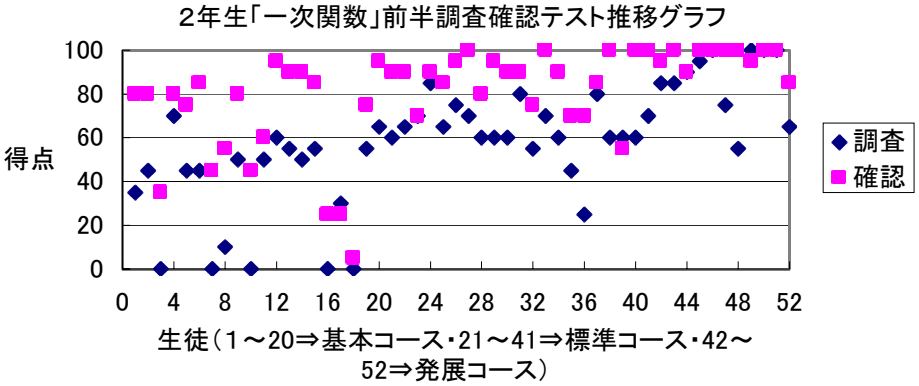
生徒にきめ細かく指導することもできました。アンケートの結果にもあるように、　生徒達は、文法・古典・小説等を含め、様々な授業でＴ・Ｔ指導を行ってほしいと願っています。この願いに応えるため、あらゆる場面に対応できるＴ・Ｔ授業を組み立てていくことが大切だと考えます。

◆　数学科、習熟度別授業アンケートと
　　調査テストから確認テストへのグラフ変化より（第２学年）

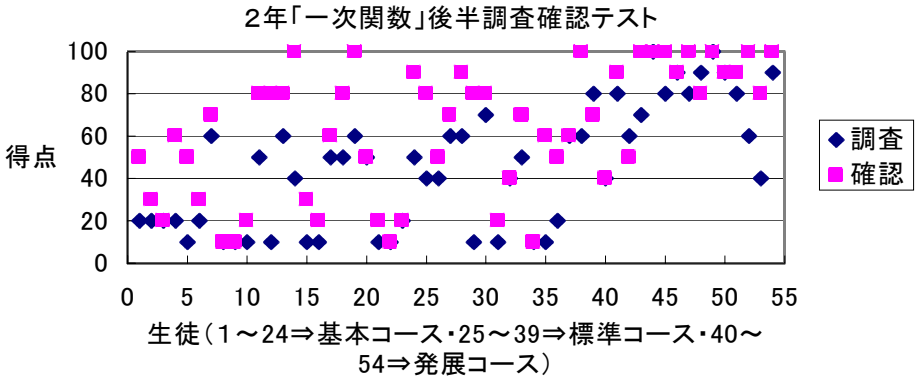
「習熟度別学習」の指導をどう考えますか。一つ選んでください。
①　賛成　　②　反対　　③　どちらとも言えない



一次関数での調査テストから確認テストへのグラフ変化



調査テスト（平均57.5）、確認テスト（平均80.8）、両方とも受けた生徒
　基本コース２０名（ 36.0 ⇒ 65.3、＋29.3 ）
　標準コース２１名（ 63.6 ⇒ 86.7、＋23.1 ）
　発展コース１１名（ 86.4 ⇒ 96.8、＋10.4 ）



調査テスト（平均45.4)、確認テスト（平均63.8）両方とも受けた生徒

基本コース２４名（ 28.3 ⇒ 48.8、＋20.5 ）

標準コース１５名（ 41.3 ⇒ 62.0、＋20.7 ）

発展コース１５名（ 76.7 ⇒ 87.3、＋10.6 ）

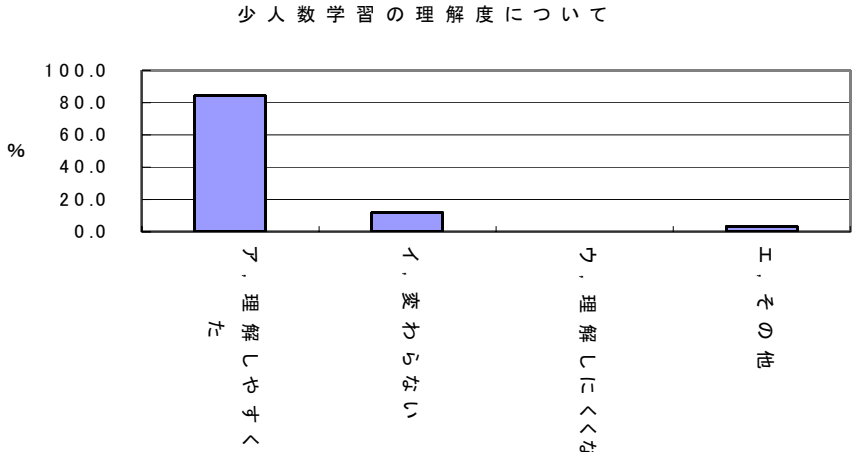
◆　英語科、少人数指導（第２学年）Ｔ．Ｔ指導（第３学年）より

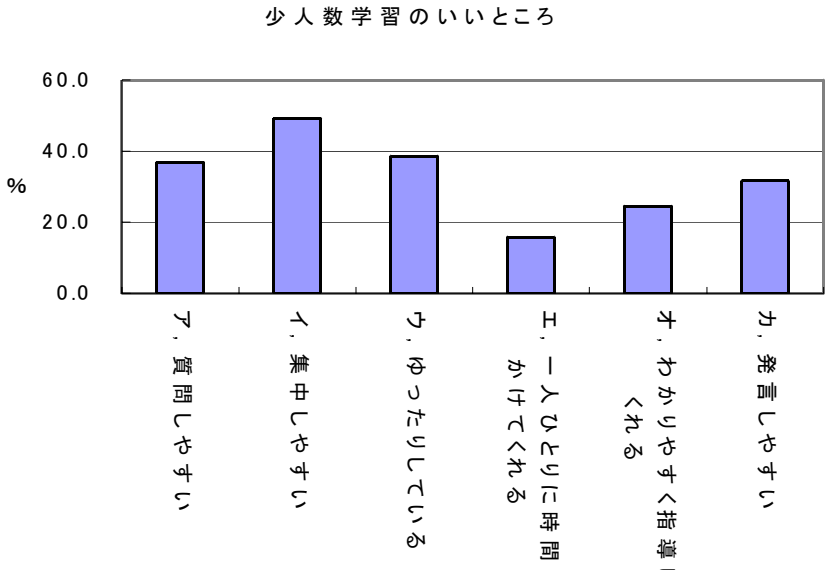
今年度から第２学年の少人数授業はＡ・Ｂの２学級をそれぞれ出席番号の奇数と偶数で２分割し、週３時間のうち１時間の割合で実施した。手探りの状態での取組ではあるが、１学級を２分割した場合、生徒数１４人～１５人になり、教室の前から３列までに座ることができ、生徒一人ひとりの表情や反応、学習の様子が以前より把握できるようになり、アドバイスや励ましの言葉も十分かけることができるようになった。

また、英語科においては、Ｔ．Ｔ授業は比較的取り組みやすく、どの単元においてもＴ．Ｔの効果的な活用が可能だと思われる。第３学年においては writing を中心とした授業を、二人の教師でどのようにすすめていけばより効果的かという目標を持って取り組んできた。Writing（作文）というのは各生徒にとって語彙力や表現力、ひいては言語理解力の差が最も顕著にあらわれてくる。今回、Ｔ．Ｔの授業を取り入れたことによって、援助を必要としている生徒や、つまずいている生徒、あるいは発表的な表現に取り組もうとしている生徒たちに対して、助言と指導を与えることが出来たと思っている。

中学校の外国語科の目標は、国際化の進展に対応し、国際社会の中で生きるために必要な資質を養うという観点から、実践的コミュニケーション能力の育成に重点をおいている。コミュニケーション能力は積極的に自分の考えを相手に伝えたり、相手の意向などを理解しようとする態度とともに育成されていくものである。少人数授業を通して、英語で表現できる喜びを味わわせることで意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が重要な課題である。

少人数授業を実施するようになって、一人ひとりの生徒がどこでつまずいているのかがわかるようになり、その生徒にじっくりとかかわり、きめ細かな指導ができるようになった。また、生徒たちは一斉指導よりも少人数のほうが、間違ってもはずかしくないという状況から、リラックスして授業をうけているように表情からうかがえる。アンケート結果から考察すると、ほとんどの生徒が少人数授業について「よい」と答えており、少人数授業を肯定し、どの生徒も「内容をもっと理解したい」という強い願いを持って意欲的に授業に臨んでおり、単に今までと違ったもの珍しさから「よい」と感じているのではないことがうかがえ、学習指導における少人数指導の有効性・必要性が顕著であると思われる。生徒たちは皆、参加型の授業で自己の充実感を味わいたいと願っている。それは、「質問がしやすい」「発表がたくさんできる」「会話を積極的に楽しめる」「集中できる」「わかりやすかった」等の理由からも判断できる。

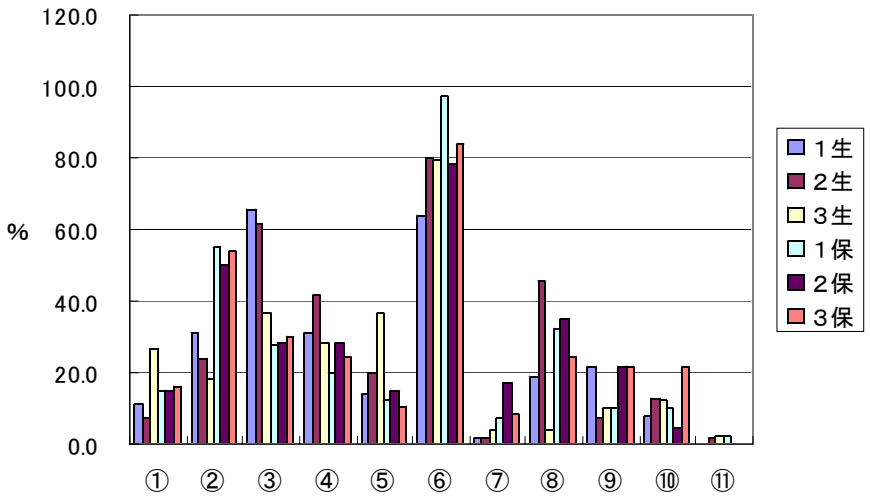




◆　生活等アンケート（１２月実施）より抜粋

（５）あなたは、どのような授業を期待しますか。（３つまで選択）

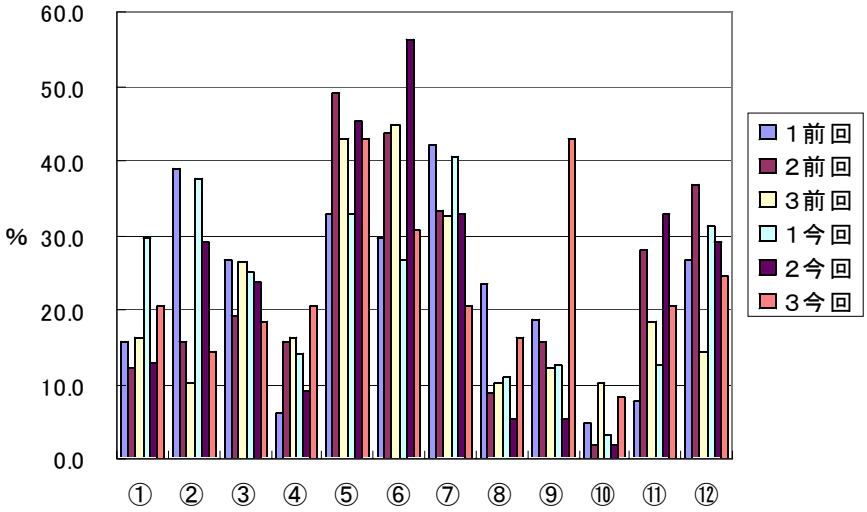
① 先生の説明が中心の授業
② 意見が取り入れられやり方が選べる授業
③ グループで話し合い友達と相談できる授業
④ 調べ学習、作業や活動、実技が多い授業
⑤ 一人でじっくり考えられる授業
⑥ わかりやすい授業
⑦ 地域の人や社会人講師の授業
⑧ 二人以上の先生が受け持つ授業
⑨ コンピュータを活用した授業
⑩ 専門的なレベルの高い授業
⑪ その他



《分析》　⑥「 わかりやすい授業 」については、当然といえば当然ながら生徒・保護者とも圧倒的に多い。保護者と生徒のギャップが大きいのは、③「 グループで話し合い友達と相談できる授業 」、「一人」より「みんな」を好む傾向が生徒に強く表れていると思われる。学年ごとの傾向としては、１年生は③「 グループ学習 」、２年生は③「 グループ学習 」・⑧「 二人以上の先生が… 」などの活動的な授業を、３年生は①「 先生の説明が中心…　講義型授業 」、⑤「 一人でじっくり… 」のマイペース型の授業を好む傾向が強いようである。また保護者は、②「 意見が取り入れられやり方が選べる授業 」という、子ども主体の授業を希望しているようである。

（６）いま、あなたが勉強している教科等の中で、好きな教科は何ですか。
（３つまで選択）

① 国語　② 社会　③ 数学　④ 理科
⑤ 音楽　⑥ 美術　⑦ 保健体育
⑧ 技術家庭　⑨ 英語　⑩ 道徳　⑪ 学活
⑫ 選択教科　⑬ 総合的な学習



《分析》　実技を伴う教科（⑤「音楽」・⑥「美術」・⑦「保健体育」）をあげる生徒が多く、活動的な学習形態を好む傾向にある。男女別に見ると、男子に多く女子に少ないのが、③「数学」・④「理科」・⑦「保健体育」、女子に多く男子に少ないのが⑤「音楽」・⑥「美術」となっており、男子が理数系及び活動的な教科を好む傾向、女子が芸術的な教科を好む傾向が顕著である。また、選択教科（28.6％）が全体の４番目であり、これは、現２・３年の３月調査時の 6.5％に比べて大幅（＋ 22.1％）に増加している。

２．今後の課題

（１）指導方法・指導形態に対する生徒・保護者の心理的な不安を払拭する。

ＰＴＡ総会や学年懇談会、授業参観やアンケート結果報告等で、授業や学校の様子について昨年より生徒・保護者の理解を得ていると思われるが、まだ不十分な点（特に習熟度別学習）がある。定期的なアンケート実施・報告により、信頼性の高いシステム作りと情報公開を粘り強く行っていくとともに、教職員の共通理解の下に対応する必要がある。

（２）少人数・習熟度別学習を行うための教室を確保する。

生徒の心理面（他のクラスへ行きたがらない）や授業を行う上での教室環境の問題について、本校の使用可能な教室は状況からみて会議室や図書室が考えられるが、少人数・習熟度別学習を他の教科に広げるとな

ると施設面での教室不足があり、教科の学習内容や指導形態等も考えると、どこがベストなのか検討していく必要がある。また、教室が決まっても、生徒の座席の位置で学習意欲が変わってくることがあるので十分な配慮が必要である。

（３）教材開発及び授業者同士の打ち合わせ等の時間を確保する。

教材作成に追われ、授業者同士の打ち合わせが十分にできないという状況から、いろんな面での時間不足が大きな問題になっている。指導方法・指導形態がパターン化されれば、ノウハウの蓄積により徐々に解消されていくものと考えている。（実際に１学期より２学期の方がスムーズに進行している）また、授業内容・評価方法の相談、教材・テスト作成などでは、教師間の意思疎通と連携で役割を分担することが重要な鍵を握っている。全体的な方向性は研究主任が原案を提示し、教科の指導内容は学年ごとにチーフを決めてトップダウン方式で物事を進め、問題点が生じた場合は教科担当者全員で検討するような現実的な対応が必要である。さまざまな指導方法・指導形態（特に習熟度別学習）を模索するためには、所有免許教科を考えた人的配慮が必要である。

（４）指導と評価の一体化した評価方法を確立する。

「観点別評価」は過去１０年以上にわたって行われてきたが、学習指導要領に基づく「観点別評価規準」つまり絶対評価は、客観性をもたせるために煩雑で難解な作業を伴うものだと感じる。「観点別評価」記録を残しても、集計作業に手間取ることがある。しかし、評価するための評価にならないために、評価が次の指導への指針となるような現実的で実用的な評価方法を検証しながら探っていく必要がある。

（５）現在の指導方法・指導形態で数値化が可能であるかを検証する。。

従来の指導方法・指導形態とは純粋に比較できないが、指導の効果を具体化するためには、個々の追跡調査等を行い、検証してなんらかの形で数値化することは必要になってくる。指導内容に系統性が強い国語・数学・英語などの教科では、習熟度別学習が効果的で数値化することも可能であると思われるが、社会・理科・総合的な学習などの課題解決能力を育成することに力点が置かれている教科では、数値化しにくいように思われる。

Ⅳ．学力把握のための学校としての取組

（１）数学科において、各単元の中で生徒の学習状況を把握するため、ティーム・ティーチングによる一斉指導のあとに調査テストを行い、その結果を参考にして生徒の希望による習熟度別指導を実施し、最後に確認テストで生徒の変容を確認している。これを、各単元２回実施している。

（２）英語科において、学期ごとに少人数授業に対する生徒の理解度や学習意欲を把握するため、５月・７月・１月の３回、アンケートを実施し、その結果を参考にして、その後のきめ細かな指導に生かしている。

Ⅴ．フロンティアスクールとしての研究成果の普及

① 学校訪問の研究授業を地域内の学校に公開。（Ｈ１５．１０．１７）
② 研究発表会（中間発表）を開催。（Ｈ１５．１１．２７）
③ ホームページを開設し、年間指導計画・学習指導案・教材プリント・アンケート等を公開。
④ 本校の取り組みについての意見を書き込めるページを開設。
⑤ 研究のまとめを発表する。（平成１６年度２学期中旬）

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　　１４年度からの継続校

【学校規模】　　７～９学級

【指導体制】　　少人数指導　　Ｔ．Ｔによる指導
その他（Ｔ．Ｔと習熟度別指導の併用）

【研究教科】　　国語　　数学　　外国語

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　　有